

## 30 世界における日本学の 成立とそれからの離脱

中山 茂 (神奈川大学)

### (1) 世界の日本研究の「研究」の「研究」

私は日本以外の場所での日本学の成立についての研究は、次の2つの理由で日本にいる日本人がやるべきテーマではないと思う。

- ① 主要な資料があるのは現地（つまり日本以外の場所）である。
- ② 外国人の日本学に対する問題意識は、日本人にはわからない。

以上の2つの理由で、私は日本人による日本学研究の「研究」、ひいては国際日本文化研究センターのあり方にも懐疑的にならざるをえなかった。

今「世界における日本学の成立」というテーマを与えられて、この機会に以上の問題をもう一度ゆっくりとつきつめて考え直してみようと思って、引き受けることにした。そして、イギリスのケンブリッジを訪れて、①の問題は少なくとも英語文献に関してはある程度解決した上で、そこの日本学研究のホープ、ピーター・コーニツキ氏の指導を受けることにした。しかし、②の問題が片づいた訳ではない。

日本人のあいだでは、蘭学史や洋学史の学会が成立するほどだから、西洋文化や西洋科学の日本への導入の問題には常々関心を持たれている。一般に文化や科学技術の移転（トランスファー）の際には、与え手よりも受け手の方が熱心であり、また研究の主体性は受け手の側にあるといってよい。蘭学史の場合も日本人の片思いであって、日本人にとって「蘭学事始め」は近代化・西洋化の嚆矢で、学者たる者は熱き感懐を寄せるものであるが、ふつうのオランダ人には昔そんなこともあったか、という程度の関心の持ち方である。

これを逆転させると、西洋の日本学の場合にも同じことがいえる。その伝達のメカニズムは、主体性のある受け手の側の方がずっとよく見える。

最近では、科学史家のあいだのまだごく一部ではあるが、西洋科学の非西洋への導入の問題に対して、西洋、つまり与え手の側から、かつての帝国主義史観とは違って、現地人の立場、つまり受け手の側の立場を深く理解し、できればそこに視点を移して、西洋科学の伝播普及の歴史を書き直そうという動きがある。その志は是とするが、<sup>1)</sup> 実際上では以上に挙げた2つの問題点の克服のために悪戦苦闘しているように見受けられる。ただ、現地人と対話・協力しながら行う共同研究からは、今までにない何かが見えてきそうな気がする。

### 科学の上下関係

学問のなかでもとくに近代科学技術のように地域でレベルの格差があって、与え手と受け

手とのあいだに一方通行関係を成り立たせている種類の関係では、現実には高度の科学技術を持てる国と持たざる国とのあいだにはっきりした上下関係の落差が歴史を貫いてきた。あえてそれを研究者の意識の上で捨象しようと意図して歴史を書くと、現実離れしたものになってしまう。

そして、科学技術を推進モーターとして内蔵する近代世界では、先進国と後進国とに峻別される。後進国という云い方は避けて、発展途上国と云い替えても、発展を前提としているかぎり、上下関係は拭いようもない。かつては植民地支配と従属関係にあったが、今も貿易上のバーゲニング・パワーは決定的に科学技術を持てる側にある。戦後では技術移転など、移転（トランスファー）という言葉をつくったが、それは上下関係を避けて、水平移動を促進しようというニュアンスと政治的意図で用いられはじめたにすぎない。そして言葉を入れかえたくらいで、支配従属関係は解決はしない。問題を隠蔽するだけである。

こうした支配従属関係のなかでは、受け手の側は与え手の喜ぶ面、つまり与え手からの光があたる陽の部分しか見せない。そうすると与え手の側ではよほど想像力を働かせない限り、陰の部分が見えてこない。そして、とかくひとりよがりの八紘一宇的史観に陥るおそれがあることは、過去の事例に徴しても、自戒されるべきことである。

### 文化相対主義

しかし、文化の移転なら、上下関係ぬきの水平移動、文化相対主義が十分成立する。かつてライシャワーが学位論文のテーマを円仁の中国旅行に絞り、中国とも日本とも違う第三者の高み（あるいは低み）から両者を対等に扱って、客観的評価者としての自分の立場を出した。それと同じようなことを日本人は世界の日本学に対してできるかも知れない。かつて日本人は江戸時代を通じてつねに中国と西洋を相対視して、客観的に比較してきた経験がある。つまりイギリスとかドイツとか、あるいは中国とか特定地域からの見方に偏した日本学よりも、第三者の高みに立って比較できるかも知れない。

### 言語習得の経験

今日の「普遍的」科学は英語で書かれている。だから英語を生得語としているところとそれ以外のところの間にはっきりした言語上の上下関係がある。科学概念も英語でつくらねば通用しない。一方、地域的科学では、そのなかには東洋学も日本学も含まれようが、おなじ言語の上下関係でも、現地語を生得語として持っているところと、それを学ぶところとの間に上下関係がある。端的に言えば、言葉を教える側と学ぶ側、師匠と弟子の上下関係である。

そこで科学の上下関係ではなく、言語習得の上下関係として事を見るならば、蘭学以来の日本における西洋学は、直接的な文化接触はないのに、はるかに遠い、見たこともない西洋の情報をいかに入手するかには受け手として苦勞してきた伝統がある。それは西洋のシノワズリよりもシリアスなものであった。そこからすれば、西洋の地域的科学や東洋学・日本学を、先輩の高みから見るができる。また科学の上下関係の受容においては日本は他の非西洋国よりも先輩である。科学において、西洋学において、つねに下風に立っていた長い経験、この両者を一緒にして、受け手として上下関係の下側にありながら、苦勞してきた経験

からして、なにか言えないか。

以上が、世界の日本学研究に対して日本人がアプローチするときに、築きあげておこうとする苦しい立場であるが、もうこれ以上強弁はよそう。具体的に何が見えるか、やってみよう。

## (2) 非公開情報としての日本学

まずはじめに、東洋についての西洋人の知識、日本についての海外における知識については、今日書かれたものはかなりよく収集されているが、書かれなかった知識の方がはるかに膨大であったことは忘れてはならない。知識を書き留めることは近代的学問社会、近代的ジャーナリズムが出来る前は、かなり例外的なことであったはずである。

情報は公開しない方が所有者にとって利益になることは、特許権・著作権による保護の存在しない社会では、今日よりもはっきりと意識されていたことであろう。日本の歴史に照らしても、江戸時代に長崎の通詞は海外情報を握ったら、それに対して謝礼を払う個人的スポンサーを探し、大名などに働きかけた。また幕藩体制側の行なった漂流民からの聞き書きも、一部で海外知識を独占する試みであって、決して出版することを意図したものではない。そうして集めた知識を出版の形で公開する頃になると、情報通として得られる直接的利益よりも、ある社会集団が成立して、その内部での名声を求めることになり、そこに何らかのアカデミックな行為が始まるわけである。徳川日本の場合も、語学力の程度は高かったが出版しない長崎蘭学から、語学力は低くても公表公開する杉田玄白の『解体新書』にはじまる江戸蘭学になって、はじめて学会活動がスタートする。

## (3) 18世紀、好事家による学会の成立

こうした社会集団は、西洋の歴史の上では、17世紀以来西欧に出現した学会であり、18世紀にはかなり西欧各地に広まる。そこでは法律家・医師・牧師など知的関心の旺盛なプロフェSSIONナルを中心としてアマチュアが珍奇な事物を持ち寄って、時には権力者の保護を得て、サロンとかアカデミーをこしらえていった。アカデミーのモデルとなるのはやはりフランス、そこに中国への傾倒、東洋学が生まれたのは、故なしとしない。

オリエンタリズムもこの中にはいる。中近東に聖書学やキリスト教年代学の起源を求めるといような宗教学的動機は極東へ来た耶蘇会士にはないが、彼らのもたらす情報に好奇心をつのらせる人たちが参加した。こうしたエキゾチズムだけでは近代的学会を形成するには十分ではない。それに現地を踏んでいる人たちと、そうでない人たちとの間の情報量・理解量には大きな差があり、現地を踏んだ人が中心となって、やっとオリエンタリストの近代学会が成立する。初期のオリエンタリスト学会では、会員が自己紹介する際に、現代ではどこの大学で誰について東洋学を学び、今どこで何をしているか、という制度上、所属上のことから始めるはずであるが、初期にはそれよりも、私はどこの国に何年いました、という現地経験をまずひけらかすのが常であった。

好事家集団としてのオリエンタリストは、母国語の読者一般に対して、みずから異境にあって発見し収集した博物学的事物を報告したいという熱烈な欲求に駆られるだろう。さらに言葉が読めるようになると、手あたり次第読めたものを西洋に対する新知識として書き留め書き送りたいと思うだろう。そうしたシノワズリとかジャポニスムとかを求める人たちを組織して東洋学会ができる。イギリスの Royal Asiatic Society などのようにフランスもドイツも同様な学会をつくり、雑誌を出版する。日本に関してはそうした報告は、幕末・明治からはじまり、Wenckstern, Nachod の文献目録に満ちているが、Nachod が戦前の1937年をもって終わり、戦後同様な試みが復活しなかったのは、オリエンタリズムの役目が済んだことを意味するのだろう。

ここで私のいうオリエンタリストとは後の社会科学的ディシプリンを持った研究者と区別する意味で、今でも生き残っているオリエンタリスト-コンGRESSに集まる人たちの意味で使っているのであるが、同時にそうしたエキゾチシズムのあこがれに動機を持つ好事家的オリエンタリストにもE・サイドが定義した意味でのオリエンタリスト的側面が裏面に張り付いていることを忘れてはならないだろう。

オリエンタリストは現地人の評価基準から自由であるから、ときに現地人学者には考えられないような発見や再評価をする。趣味的な好奇心からエロティカや民間俗信のたぐい、現地の知識人が眉をひそめるような研究対象に何のこだわりもなく入っていく。アストンなどが江戸の好色文学に注目して紹介しなかったら<sup>2)</sup>、日本の文学界によって再評価されることはかなり遅れたであろう。こうして異文化交流の際に現地人の学問の枠が広がってゆくことは、学問史上常にみられることである。

#### (4) 出版される日本学

はじめは極東の名のもとに中国を中心として学会や学会誌が成立し、それから日本部が別れて独立する傾向がある。中国では *Chinese Repository* が1832年から広東で出版されているが、そこには日本についての記事も散見する。これは1851年で廃刊されるが、その名を襲って1863年からはロンドンで *Chinese and Japanese Repository, of Facts and Events in Science, History, and Art relating to Eastern Asia* が2年の短命ながら発刊されている。

オリエンタリストは初めのうちは一般誌、たとえば1869年創刊の一般科学誌 *Nature* のような雑誌に初号から異国で見聞した事物についてさかんに投稿する。言語による文化伝達の途がまだ十分開けていない時期には、人文・社会的知識よりも、現地語をマスターしなくてもわかる自然や技術についての報告が多い。それはあくまで西欧社会の読者を対象にしたものである。

さらに地域をしぼった投稿メディアが成立し、専門誌ができるとそちらの方に投稿先を変える。また、現地にいるオリエンタリストにとっては、原稿が永い船旅を経て欧米に送って出版するのは不便だから、現地で出版メディアを持つとうとする。たとえば、*Transactions of Asiatic Society of Japan* が1872年から横浜で出ると、読者はもっと絞れるから、より専門的なことが書けるかわり、視野も狭く絞られてくる。さらに Royal Asiatic Society に

Japan Branch ができ、その専門雑誌が出されると、さらに視野が絞られ、専門性が高くなるかわりに、一般性を喪失してゆく。

フランス語では、1873年には la Société des études japonaises, chinoises, tartares et indochinoises a Paris がつくられて、Memoires を出し始め、1892年からは *Revue française de Japon* が東京で発行される。ドイツ語では *Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ost-Asiens* が1873年から東京で刊行されるようになる。

### (5) 大学でのディシプリン

18世紀をアカデミーの世紀とすれば、19世紀は大学の時代である。近代語が大学で教えらるようになって、東洋語もその中に入ってきた。1814年にコレージュ・ド・フランスに中国語教授を任命したのが、東洋語教授の最初とされるが、19世紀中にはヨーロッパの主要国で中国語だけでなく、日本語の教授も始まっている<sup>3)</sup>。

オリエンタリストが外交官、宣教師、商人など他に職業を持っていて、好事家的に異国趣味的アプローチをしている間は、彼らは一般読者やさらに異国趣味サークルに対して報告していればよい。彼らの間での名声は欲するが、次の世代を教育する義務はない。

ところがオリエンタリズムが実際上の必要に駆られて、教育ディシプリンとして大学の中に入ってゆくと、アカデミーや同好会で行う学問的営為とは違った趣を呈する。

まずそれは大学で1年あるいは数年の長さで教育可能になるように、教科書的に整理される。その卒業生の集団の間で専門学会が成立する。むやみにいろいろな言葉を覚えて得意がるオリエンタリストは、あれはアマチュアだと学会で陰口をきかれるようになる。

さらに大学は科学研究の場であることが19世紀のドイツ大学以来意識されることになった。ただ、19世紀の間は科学研究の中心は自然科学であって、オリエンタリズムは大学に入っても辞書・辞典の編集などまだ主として言語学的問題にかかわっていた。

大学とか教育機関で語学や地域研究を効率よく教えるために必要なものはなにか？ 辞書が成立していても、異国語をシステムティックに能率よく教えるために、さらに文法の教科書が必要であろう。

文法というディシプリンはもともと東洋にはなかったが、西洋ではアリストテレスの三科(トリヴィウム)の一つとして、古くからディシプリン化していた。これを東洋に來航した耶蘇会士が布教の際に導入したのは当然である。ロドリゲスなどがいち早く日本語の文法を著しているが、日本人の問題意識からはまだ遠くて、江戸時代には忘れ去られた。しかしフランスでは18世紀前半にフルモンが中国語文法書を出版しており、19世紀前半にロドリゲスの文法を仏訳したことがある。

また、中国や日本では、一時グラマーに対する訳語も使われたものの、定着しなかった。今日われわれの使っている活用による国文法は西洋と独立して本居宣長の学統のなかで出来、また「文法」が造語されたのは、本居春庭だという。本の題名として現れるのは、明治6年の高田義村・西海古海『皇国文法階梯』が最初であろう。

西洋語の文法が東洋人によって真剣に取り上げられたのは、長崎通詞の出身である志筑忠

雄からで、それが鶴峰戊申など国学者にも影響したようである<sup>4)</sup>。

通訳兼イギリス外交官として1864年に日本に赴任したウィリアム・ジョージ・アストンは、満足な文法書が入手できなかった。1860年代に日本国内の外人居留地では西洋の文法でとらえた簡易版の日本語文法があるくらいであった。そこで、1869年に商人たちの日常会話に直接役立つような *A Short Grammar of the Japanese Spoken Language* を長崎で出版し、それは版を重ね、フランス語にも翻訳された<sup>5)</sup>。さらにチェンバレンは日本人にはない比較の視点から日本文法を扱って、外国人にとって今でも役にたつ本 *A Handbook of Colloquial Japanese* (1888) をつくった<sup>6)</sup>。このような西洋人による日本語文法づくりは19世紀中葉にあっては英語国人の独占物とはならない。フランス語、ドイツ語、それぞれの試みがあり、互いに影響あっている。それに、本来、文法は外国人のためのものである。外国人の実用むけの日本語文法の発達と日本人が西洋の影響を受けてアカデミックに国文法を整備してゆく方向とは、相互に影響されながらも、それぞれ独立して発達したといえる。西洋人は自国語の文法用語をつかって日本語文法をつくる。西洋語のための文法用語を日本語にあてはめて、日本語文法を形成すると、どうしても無理がゆく。そこで西洋でも戦前に一時日本語の活用文法を取り入れていたそうである。しかし、実用文法にはならないので今ではすっかり止めている。逆に、日本人が英語の文法を学ぶとき、英語の文法用語を訳して使っているのは、結局文法というディシプリンの彼我の歴史のちがいによるのだろうか。

辞書の方は文法書とはまったく独立した展開をする。英語国人に対する和英の辞書については、初期の段階では実用会話の辞書をはじめとしていろいろな試みがあったが、彼らも1930年代からは日本人のつくった和英辞書によることになった。それだけ日本の英語学会の方が彼らの日本語学会よりも進んでいたことになる。

もっとも、我々日本人が英語で書こうとして、研究社の和英辞典を引いても、役にたたないことは、経験のある人なら誰でも知っている。所詮辞書は外国語を母国語に翻訳する際に使うものである。言葉の収集力では現地人がまさるが、それに適切な訳を与えることは母国語でしかできない。和英辞書の英語は英語国人が見たら英語の表現に不適切どころがあっても、彼らにはそれをみずから修正する能力があるから、余り問題にならない。

## (6) オリエンタリズムから社会科学へ

20世紀になると、アメリカ大学院の整備とともに、大学院に従来の自然科学と人文学（ヒューマニティ）という分け方のほかに社会科学が入ってくる。経済学、心理学、社会学、人類学などである。自然科学にならって社会科学は地域性を捨象して普遍的原理の発見を目標とする。社会学者は文科であっても科学者なのである。すると、大学の教授社会では、オリエンタリズムや語学教育よりも社会「科学者」の方が幅を利かし、威張ることになる。

オリエンタリストの役目は新天地での見聞を世界の中心（西洋）にもたらし、学問的・科学的研究の材料として提供したことである。ところが、その材料を科学的に検討するためには、オリエンタリストには科学の素養と資格がない。それができるのは大学の（社会）科学者である、というのが、後者が前者と一線を劃そうとする時の自己主張である。彼らはた

たとえば、私のディシプリンは経済学とか歴史学とかで、たまたまそのフィールドが中国や日本であるにすぎない、というだろう。またそうすることによって、言語上の上下関係、つまりハンディキャップを克服しようとする。いつまでも現地人の後塵を拝してはおれない。

20世紀中葉になると、オリエンタリズムのたいていの地域研究で、文法書・辞書・語学教科書の作成は一応終わって、もはややるべき大きな仕事がない。その後は、こうして身につけた語学を道具として使って、科学しようということになる。語学教育は、あるいは中等教育に格下げしてもいいのではないか、という議論も起こる。アメリカなどでは大学内では単なる語学教師は地位が低い。そのままで新天地を開かないと、日本の大学における語学教師プロフェッションのようになる。

そして学者は何らかの科学の専門ディシプリンを持っていないと、大学の中では肩身が狭い、という気風が起こる。とくに戦後のアメリカでこの傾向は顕著になって、この中で、古いオリエンタリスト的アプローチが社会科学ディシプリンに席をゆずって、世代交番が起こる。これがアメリカの50年代、60年代に起こったことであつた。こうした社会科学ディシプリン成立を境として、東洋学者も古くからのオリエンタリストと新興社会科学者へと分かれる。

#### (7) ローカル・パラダイムの成立に向けて

当然のことながら、ここで強調しておかねばならないことは、彼らの読者は現代人（中国人や日本人）ではないことである。いまかりにアメリカの大学院にいて、日本の政治関係の学位論文をつくろうとしている男を例としてあげてみよう。

彼の学位論文の審査委員はふつうアメリカ人である。学位論文は審査委員に向けて書くものであるから、その問題意識や関心に沿うものであらねばならない。彼の視野には日本の学界は入ってこない。そのかわり審査委員の中には日本語も読めず、日本について無知な他の分野の専門家も入っているだろう。これら審査委員に共通しているアメリカの学界の問題意識に対して彼は書いているのである。

学位論文がすんで、自分で学術雑誌に投稿する段になると、これまたその雑誌は日本人が読むことを前提にしたものではない。読者はあくまで書き手と言語を共有する学者仲間である。

原資料の博捜は現地人がやるべきものだし、彼は限られた少数不可欠の日本語の原典は読み、引用するが、一般に日本人の書いた論文はあまり読まない。日本人が日本語の学術雑誌に書いた論文は膨大にあることは知っているが、それを限られた語学力で全部読んでから自分の論文を書こうというのでは、いつまでたっても論文は書けない。問題意識が違うから、全部読んでも意味がないというのが、彼の側の理由である。

なかには偶然にしる剽窃に近いようなことも起こりうるが、彼は日本の学界に向けて書いているのではないので、アカデミックな礼儀をたつとぶ義理はない。日本語で書く学界と彼の言語で書く学界とはまったくちがう学界を構成していて、両者にまたがる先取権問題はほとんど問題にされることはない。

しかし、それよりも重要なことは、彼らの書いたものが彼らの言語空間の中で引用され続け、そして一定量たまって、研究者個人の読破可能量を越えるくらいになると、もう日本語を読まなくとも、彼らの言語の出版物を読むだけで、学問的営為を行なうことになる。この段階に至って、日本語を読めない一般政治学者もゲームに加わって来て、日本語文献を知らずに日本の政治を論じることになる。こうして日本の学界とは独立して、日本政治のディシプリンが彼の現地語ででき、現地語による相互引用グループが成立する。そして、日本における日本人による日本研究のルート・パラダイム（「パラダイム」はトマス・クーンの初期の定義に忠実に使用する）のサブ・パラダイムらしきものもあらわれる。日本語のパラダイムのほかに、英語で書く人なら、たとえば必ずサンソムやライシャワーを読んでいなければならない。これらサンソムやライシャワーの本をサブ・パラダイムと呼ぶことにする。

そのサブ・パラダイムが独立してローカル・パラダイムとなる。ここでいうローカル・パラダイムの定義は、ルート・パラダイム（本流）から自由に成果を受け入れながら（あるいは語学的障壁のために受け入れないで）、本流に影響することなく、本流には知られないまま通常科学的発展をするその元になる、独立・孤立したパラダイムである。つまり、その学問の主要語が日本語であるにもかかわらず、英語だけでコミュニケーションする研究者集団の出発点となる必読文献が、そのパラダイムである。しかし、日本語の引用グループからは、外国に成立したこのようなサブ・パラダイムやローカル・パラダイムは無視され続ける。なお、日本の柳田民俗学や今西スクールは世界語の英語では知られていない、日本語の世界だけのローカル・パラダイムである。

逆に考えて、日本の社会科学における丸山学派、大塚学派の成立過程を考えてみれば、このことは日本の読者にも了解されるだろう。こうしたサブ・パラダイム・グループは西洋の文献を知りつくし、彼らの仕事の最前線の知見を獲得することにつとめ、あるいは時に彼らの仕事を嘲笑しながら、学問的営為を行う。これらは日本語による日本人の論文に引用され続け、独自のローカル・パラダイムとして機能し続ける。日本人で日本語で政治学の論文を書く者にとっては、ウエーバー・パラダイムのほかに、丸山真男の著作はサブ・パラダイムとして当然読んでいることが日本人政治学者の前提になる。

ただ彼らの行った概念構築は絶対に西洋主流には影響しない。自然科学の単純明快な概念ならまだしも、社会科学では日本人のつくった和製英語ではなかなか国際化しない。私がここで使った「サブ・パラダイム」も、「ローカル・パラダイム」もその一種である。

また、日本語で概念構成しても、それを英語になおしてはたして正確に意味内容を伝えるか、疑問である。また自分の例を出して恐縮であるが、私はかつて「虚学支配の構造」を唱えて、行政組織における人材登用選抜の際に、虚学の方が実学に優先することを示した。その「虚学」を英語にするときハタと困った。「虚学」は古典に出典を求められるような正式の言葉ではないが、日本人にはそのニュアンスがわかる。ところが、陰陽論的発想のない英語では、negative study, empty learning, virtual scholarship などいろいろ試みたが、何のことやらわからない。結局十分通じないままに終わった。

また、昨今のように英語が唯一の国際語としての地位を確立させると、ドイツ語の引用グ



ループのあいだにも日本の社会科学のようなローカル・パラダイムが発生し、自国外にその存在が知られない研究グループが発生しつつある。英語で書かれた日本学ならまだ日本人のあいだにも読む人がいるが、ドイツ語で書かれた日本学はその存在も知られないまま独立したローカル・パラダイムをつくるだろう。

それ以後、時に両者間に橋を架けようという人物が現れない限り、日本語の引用グループと現地語の引用グループとの間にはますます距離が開くようになる。

## (8) 東洋学から日本学へ、そして脱出

19世紀西洋では、漢字修得の文脈からすれば、日本語修得の前に中国語をマスターすることが前提となっていた。そして東洋学の中心に中国学があり、その分かれとして日本学があった。OEDによればシノロジーの用例は1830年代にあらわれ、1880年代E・M・サトウが日本学者（ジャパノロジスト）と呼ばれているから、その頃から日本学が可能になってきたのだろう。

しかし、これらの位置関係は研究者の関心によって変わってくる。60年代末に学問への間直しが西側先進国で起こり、かつてのディシプリンが再検討され、とくに社会科学はその影響を強く受けた。その結果、かつて社会科学で経済学が、ちょうど自然科学で物理学が持ったようなモデル学問的地位から追われ、相対化が行われた。そして、人類学的なアプローチに関心もたれ、西洋優位一辺倒の学問的伝統がかげりを見せ、この傾向は西洋における東洋学に活気と自信を与えた。それは東洋学を「辺境の学」から解放する。

文化・歴史としてよりも社会科学としてアプローチするようになると、かならずしも中国から日本へという順序を踏まなくなり、それに語学教育の成長発展も併行して、ほぼ1970年くらいが境となって、日本学が中国学から独立する。そして高度成長を終えた日本が研究対象として取り上げられる。

こうした研究者、たとえば日本の高度成長の研究者は、日本学者といわれたくないだろう。日本学といっても、何をいまさら、というだろう。日本でも福沢諭吉の段階なら洋学者とか西洋学者とか言われそうですが、今日の経済学者を西洋学者というと、奇妙にひびく。西洋の日本学者もそのような状態へと日本学からの脱出を行いつつあるのが現状である。

その極では、日本語をほとんど知らなくても、ある社会科学的な方法によって、日本の調査研究は可能である、と信じられている。たとえば日本人の助けを借りながらも、アンケート票をつくって観察対象である日本社会に配布し、またインタビューして、ちょうど動物園の動物を観察するように日本人を扱って、その成果を英語で発表する。その人たちはおそらく次には日本以外の外国で同じことを試みて比較する。<sup>8)</sup>

こうしたクラシカルなオリエンタリストと社会学者との差を感覚的印象的に示せば、日本に来ればまず歌舞伎座にゆく前者と、秋葉原に駆けつけて日本語のソフトウェアを探す後者との違いであろう。

彼らは自らの言葉で書く学界のみに向けて書くから、その著述は取材対象としての日本から自由である。取材に当たって、世話になった日本人に義理はない。むしろそれよりも、彼

らの学界内での評価基準がきびしくはたらく。日本と外国の読者は違う。普遍的であるかのごときアカデミックな読者でさえも違う。日本人とは違う立場で日本を見、いきおい批判的になる。その批判的視点には日本人では気がつかないような、興味あるものを多く含む。その中には当然日本人による日本学への批判も含む。

たとえば、オーストラリアの日本学界などでは、日本に対して批判的でなければ、学会の審査にもパスしないくらいである。例としてあげると、テッサ・モリス・鈴木<sup>9)</sup>の著述 *Beyond Computopia* (Kegan Paul International, 1988) などがその好例であろう。また日本語にも翻訳された彼女の『日本の経済学者』(岩波、1990) は現在の日本の経済学界を国外の高みから見るもので、日本人の間ではかえってやりにくい仕事として評価される。

外国人が外国の社会ないし学界に向けて日本を語る。それは、我々日本人には見えない陰の側面が出ているだろう。そうした彼らの批判的精神を買おう。つまり、日本人にとって、あるいは日本の学界にとって、外国の日本学・日本研究の唯一最大の貢献は、日本に対する批判的視点を示すものとして評価されるべきである。

## (9) 東洋の日本学

西洋以外でも、日本との接触のあまり強くなかったところでは、西洋人の日本学を取り入れようとするに留まるだろう。戦前のタイでは日本学は欧米留学経験者によって英語で書かれたテキストを使って始められた<sup>9)</sup>そうである。

西洋以外では日本学文献の発達は西洋における日本学文献の翻訳から始まるが、ただ一つ東洋、つまり漢字を使う文化圏では独自の発展を遂げる。中国の場合日清戦争までは日本から学ぶ態度は皆無に近いが、戦争を契機として急に日本への留学生が増し、日本語の科学教科書などがどしどし翻訳されはじめる。

そこでは漢字を学ぶ必要がない。辞書もふつうは共通であるが、特殊な言葉だけは日本と違った発達をしているから、そのあいだの対照表をつくれればそれでとりあえず用は<sup>10)</sup>足りる。

彼らの視点からすれば、日本の古典学、たとえば江戸儒教の研究などは中国の垂流にすぎないから、関心をもてない。日清戦争が大きなターニング・ポイントである。それ以前と以後とでは日本の見方が変わった。彼らの日本観には実用と近代化の手段を日本から取ろうという実用主義・功利主義が支配している。

しかし、五四運動の頃から日本の侵略的態度が強まるにつれて、近代化モデルとしての日本像がはなはだしく後退し、日本学は中国の知的社会では冷遇される。日本の旧植民地でも中国に準じるような展開を遂げ、かつての被害意識から立ち直っていない現状であろう。それから日本の侵略。加害者の方は忘れたいし、忘れるが、被害者には忘れられるものではない。

今でもかつての侵略国日本を研究する人たちは、一般社会にたいしても、大学内にたいしても、肩身の狭い思いをすることがあるだろう。そのもっとも顕著なケースは韓国にみられる。そこでは戦後20年は日本語・日本研究はタブーであつた。<sup>11)</sup>しかし日本の影響力の強まった今、研究対象として取り上げざるをえない。被害者の意識を持って日本の近代化を見る。

台湾の学者はこのアンビバレントな感じを情結と表現したが、この緊張感の強い学問的環境で行った学問的営為は、単なるバイアスによるものとして片づけられない、我々には完全に欠落した視点を提供してくれる。

#### 注釈

- 1) L. Pyenson, *Empire of Reason: Exact Science in Indonesia 1840—1940* (Brill, Leiden, 1989)
- 2) P. F. Kornicki, “William George Aston (1841—1911) in Sir Hugh Cortazzi and Gordon Daniels eds., *Britain and Japan 1859—1991 Themes and Personalities* (Routledge, London, 1991) p. 72
- 3) (フリッツ・フォス「ヨーロッパの東洋語学事始」『東北大学日本文化研究所報告』第25集 1989、3月)
- 4) 福井休蔵『増訂日本文法史』1934、589 p.
- 5) Kornicki, pp. 67—68
- 6) Richard Bowring “An Amused Guest in All: Basil Hall Chamberlain (1850—1935)” *Ibid.* pp. 130—131
- 7) 中山茂『帝国大学の誕生』(中公新書)
- 8) Sharon Trewark や Lilian Hodgeson が日本人の物理学者のコミュニティを調査したのはその最近の例である。
- 9) バイヤット・スカランヴィタ「タイの日本学」『アジアにおける日本研究』(国際交流基金、1988)
- 10) 中山茂「近代西洋科学用語の中日貸借対照表」『科学史研究』(1992春) Series II, vol. 31, (no. 181) pp. 1—8